



第40回 日産 童話と絵本のグランプリ

今日にかぎって

樺島 ざくろ

かぎがない！ 気がついたのは、五時半の夕やけチャイムが聞こえたあとだ。そろそろ帰らなくっちゃ。そう思っ

てズボンの右ポケットに手をつっこむと、

からっぽだった。あれ？ たしかにここ

に、自転車のかぎを入れたのに。左ポ

ケットも、おしりのポケットも調べた

けれど、やっぱりない。胸がドキン！

と、ひとつ鳴る。

ええつと、おちついて思い出そう。

通りすがりにウッチーと、この公園を

発見して、それで自転車を止めたんだ

よな。まずはアスレチック、それからター

ザンロープで遊んで、最後にジャングル

ジムに登ったんだっけ。

順番通りに公園をまわって探したけ

れど、かぎはどこにも見あたらない。

どうしよう。ジャングルジムのつべん

で、ぼくの胸はドキドキめつしはじ

めた。

公園にいた子はみんな、ぼくを残し

て帰っていく。今日にかぎってウッチー

のやつ、先に帰ったからなあ。ぼくは

口をとがらせた。

ウッチーのケータイが鳴ったのは五

で探してみる。ない。ない。ここにも

ない。ターザンロープの通り道もたどっ

てみたけれど、ない。かぎはいつたい、

どこに消えたんだ！

時こくは五時五十五分。もう自転

車を置いて帰ろうか？ でも取りにく

るのがめんどうだな。しばらく考えて、

ぼくは自転車を運ぶことにした。かす

れた文字で渡辺と書いてある青い自転

車。その荷台をひよいと持ち上げる。

これで前のタイヤは動くわけですよ。

なんとかなるんじゃない？ とにかく

急いそう。

けれどいくら歩いても、目指す道は

現れない。それどころか角を曲がるた

びに、新しい団地が次から次へとわいて

くる。なんだか、ダンジョンに迷いこん

だみたい。同じ顔をした団地の中から、

真実の出口を見つけ出せ！ 気持ちば

かりがあせる。

左手でハンドルをにぎり、右手で荷

台を持ち上げていたら、うでが痛くなっ

てきた。よいしょつと。ためしに今度

はサドルを持ってみる。やっぱり重い

なあ。持ち手を何度も変え、つかれた

時前だ。

「ナベごめん。おれ、用事があるのを忘

れてた！ お母さん怒ってるから帰ら

なきゃ」

そう言っであわてて帰るウッチーを

見送って、ぼくはひとり公園に残った。

ちよつと遠くの知らない公園を探検

するのが、最近のぼくらの流行だった。

となり町の団地の中のこの公園は、今

日のほりだし物だ。広くて、おもしろ

い遊具がそろつていて、ぼくらはすっか

り気に入った。なにより、クラスの子

がだーれもないのがいい。

いじめられるわけじゃないけどさ、

ぼくらみたいな運動ぎらいな子にとっ

て、新しいクラスは、少しいごちが

悪かった。だって、スポーツ好きな子

が多いクラスだったから。なかでも苦

手なのが、松田くんと山本くん。ふ

たりとも運動神経がばつぐんで、体育

の授業や休み時間の遊びでも本気で勝

負にこだわる。同じチームになったら、

足手まといになって、きつと文句を言

われるんだらうな。

学校近くの公園では、クラスのみん

うでをだましだまし、ぼくは歩いた。

もう少し。もう少しであの通りに入る

はず。そうしたら、家まですぐじゃな

いか。

けれどダンジョンをクリアしたはずな

のに、目の前には見覚えのない大通り

が広がっていた。うそでしょ？ もしか

して道をまちがえた？ 交差点の信号

が、通せんぼするみたいに赤になる。

もう無理。ゲームオーバーだ。

お母さん、きつと心配してるよね。

くたくたで、うでが痛くて、おなかが

すいた。今何時だろう？ だめだ、なみ

だが出そう。

近くのバス停には、習いごとの帰り

なのか、子どもたちが笑いながら並ん

でいた。いいな、みんなのんきそうで。

ぼくとは大ちがいだ。

「あれ、渡辺？」

急に声をかけられて、驚いて顔を上

げる。バス停に、クラスの松田くんの

顔が見えた。

「え、松田くん？ どうして？」

「おれスイミングの帰りだし。渡辺こそ、

どうしたの？ 自転車こわれたのか？」

ながよくサッカーをする。「一緒にや

んない？」って声をかけてくれるけど、

ぼくたちは「いいよいいよ」ってすぐに

逃げてしまうんだ。だつてサッカーう

まくないし。ウッチーとゲームの話とか

する方が、気楽で安心するんだもん。

それでなんとなくみんなをさけて、ぼ

くらは遠くまで探検するようになつて

いた。

公園の時計は五時四〇分を指してい

る。やばい、六時までに帰らないと。

そうだ、電話してお母さんにスペアキー

を持つてきてもらおう。そう思いついて

リュックのケータイを探すけれど、今

日にかぎつてどこにもない。

しまった、充電したまま忘れてきた

んだ！

こんなことつてある？ ぼくはほう

ぜんとした。今日にかぎつてかぎをな

くし、今日にかぎつてウッチーが帰り、

今日にかぎつてケータイを忘れ、そし

て今日にかぎつて知らない遠くの公園

にいるなんて。サイアクだ。

だけど、なんとかしなくちやな。夕

やけ空の下、もう一度すみからすみま

「ぼく道に迷って。かぎもなくなっちゃって」

「マジかよ。渡辺んちって一丁目だろ？こつからけつこう遠いぜ？」

「遠いという言葉が、グサリとむねにつきささる。そうか、まだ遠いのか……。」

そのとき、バスがやってきた。

「マツ、乗らないの？」

先に乗り込んだ子が松田くんを声をかける。すると松田くんは少し考えて、「いや、おれ乗らねー。歩いて帰るわ」と手をふってバスを見送った。そしてびつくりしているぼくになにも言わず、勝手に自転車カゴにプールバッグを放りこむと、後ろから荷台を持ち上げた。

「道案内してやるよ。松田ナビで」

「でも」

「いいからいいから。はい、そこ右な」

おかしな事になったな。ぼくがハンドルをにぎり、後ろから松田くんが案内する。知らない町で知ってる顔に会えたのはうれしいし、助けてくれてありがた。でも、よりによって松田くんなんだなんて！ せなかが緊張してしよ

「今日にかぎって、本当に変なことばかりおこる。だって今、ぼくの荷台を、松田くんが山本くんが両側から支えているのだから。」

「そういうええ、渡辺はなんであんなところをいたんだ？ なんか用事？」

「松田くんが荷台の右側を歩きながら言った。」

「ううん、公園探検。ぼく、このごろウッチーと、知らない公園を開拓してるんだ」

「へえ！ ほかにいい公園あったか？」

左側から山本くんが、おもしろそうに口をはさむ。ぼくは、ちよつとうれしくなった。

「うん！ ハトだらけの公園とか、ロケットの遊具がある公園を見つけたよ。でも一番はローラーコースターのある公園かな。とにかく長いんだ！ 二駅先の駅の近くだけど」

「なあ。今度連れてってよ。その公園」

「みんなで行こうぜ！ 内山もいっしょにぎ」

松田くんも山本くんも苦手なはずな

うがない。なにを話したらいいの？

「……松田くん、重くない？ かわろうか？」

「やつとの思いで声を出すと、

「めつちや重てえな、これ！ 渡辺、どつから運んできたの？」

「逆に質問された。」

「団地の公園だよ。ターザンロープがあるところ。道に迷って、うろろうしてんだ」

「それ、そうとう長い距離じゃねえか。」

「すつげえ！ 渡辺って、意外と根性あんな」

胸のまんなか、ポツと火がついたみたいに熱くなる。うん、ぼく、長い距離を歩いてきたんだよ！ 声にはならなかったけれど、ハンドルをにぎる手にぐつと力がこもる。

「あ、いいこと考えた！ よし遠回りするぞ」

遠回りなんていやだけど、しかたなくナビの通りに進むと、一けんの家の前に着いた。

「松田ですけどー！」

慣れた調子で松田くんがインターホ

のに。ぼくは迷わず「いいよ！」って答えていた。だつてふたりに公園を見せたくなつたんだ。

気がつく、見慣れた道が見えてきた。「ここがいいよ。もう、うちの近くだ」

「そつか。じゃあ、また明日な、ナベ」

「ナベ！ バイバイ！」

山本くんはスケボーで、松田くんはなぜかなわとびで走りとびをしながら去っていく。

「あのさあ！ ふたりとも、ありがと

うね！」

思ったよりも大きい声が出た。風が

ほつぺたをなでていく。街灯のせいなのか、ふりかえって手をふるふたりが、まぶしく見えた。

さてと。最後の直線コースをひとり

で歩く。帰ったら、怒られるのは確定

だな。でも、今日にかぎってはこわくない。「遅くなつてごめん！」ってあや

まったあとに、話したいことがたくさんあるからね。

「げんかんで呼吸を整えると、ぼくは

「ただいまー！」と、元氣よくドアを開けた。

ンを鳴らす。出てきたのは、なんと山本くん！

「なんだよマツ！ と、渡辺？ えつ、

ふたりでどうしたの？」

「驚く山本くん、松田くんが説明

する。」

「渡辺が自転車のかぎなくしてき。山

ちゃん、スケボー貸してくんない？

後ろのタイヤ乗つけたら、楽に運べる

かなつて思つて」

「なるほどねえ。いいけど、ちよつと待

てよ。こうしたら、もつといいんじゃね？」

山本くんは、スケートボードの上に

スタンドロックをかけた後輪をのせると、

なわとびのなわで固定してくれた。

「わつ、ありがと！ これならひとり

で帰れるかも。返すのは明日でもいい

かな？」

すると山本くんまで、

「ぼくがいうと、松田くんがツッコんだ。

「渡辺、この辺の道わかんねーだろ？

家の近くまで、もう少し松田ナビやつ

てやるよ」

すると山本くんまで、

「え、なにそれおもしろそう。おれも行

く！ 山本ナビも追加でー！」

審査員コメント

友だち関係は、子どもの心を占める大きな問題です。自転車の鍵をなくしたことが、友だちとの新しいつながりを生み、お互いの理解を深めるようすが巧みに描かれています。疑問符や感嘆符が多いのが気になりますが、文章も読みやすかったです。

吉橋 通夫

榊島 ざくろ

主婦 東京都

受賞のことば

頭の中に物語の切れっ端が飛んでくることがありました。でも忙しくて、立ち止まりませんでした。このままだと、切れっ端は誰にも知られず消えていくのだな。あるときふと悲しくなりました。そんなのだめだ。大切なものなんだ。私はいま、切れっ端を集めて繋いでいます。誰かにぴったりの物語が作れますように。頂いた賞を励みに書き歩んでいきたいです。

受賞歴 第39回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

